

論文

山口鷺流台本の系統 (三) —春日庄作自筆本をめぐって—

稲田 秀雄

(承前)

前号に引き続き、春日庄作自筆本(以下、春日本とする)所収曲の系統的位
置づけについて考察するが、前号掲載分「大盤若」で触れた阿部福之助につ
いて、若干の補足しておく。

『能楽』第9巻6号(明44・6)「地方能楽界」に「野田神社第四十年祭神事
能番組(明治四十四年五月十六日)」が載る。その番組のうち、「翁」「経政」
の囃子方として、阿部福之助の名が見えており、いずれも小鼓の役である(「翁」
は脇鼓)。この通り、阿部が小鼓役者であったとしても、彼が「大盤若」の台
本を所持していたことは不審ではない。同曲では、巫女が神楽を舞うのであり、
狂言の神楽は笛と小鼓で囃すのである。アシライの必要から、春日庄作が台本
を与えた(あるいは阿部が請うたか)可能性があろう。もちろん、狂言役者と
小鼓役者を兼ねていたかもしれず、阿部福之助の活動の詳細については、さら
なる調査が必要である。

16、「蟬」

【次第】

本曲は、夢幻能形式を模した、いわゆる舞狂言の一種である。冒頭の僧の次
第は、春日本では以下のような詞章である。冒頭の僧の次

我か手枕の夢覚て。くうつ、の旅に出よ

鷺伝右衛門派は、享保保教本「イツクトモナキ往来ノく身ノ程何トナルラン」
とあり、常磐松文庫本、長府伝承本である浜田本も同じである。

一方、鷺仁右衛門派は、賢茂五番綴本「泊り定めぬ往来の。く。旅の衣ぞ
やふるらん」(遺形書及び佐渡伝承の安藤本も同じ)とあり、伝右衛門派とは
かなり異なる。

大蔵流では、本曲は虎明本のみであり、同本には「いづく共なき往来の、く、
身のはて何と成ぬらん」とある。和泉流は、雲形本(別編)「ゆくへもしらぬ
往来の、く、身の果何となるらむ」「狂言集成本」いづくともなき往来の。く。
身の果何となりぬらん」となっており、狂言集成本は虎明本に同じである。

以上により、春日本の次第は、鷺流両派とも、また大蔵・和泉両流とも重な
らない独自の詞章であることが明らかである。

【道行】

続く道行の文句は以下の通りである。

住ミなれし。花の都を立ち出てく行衛定めぬ旅ながら日を重ねつ、行程
に知らぬ里ニも附にけり

享保保教本は「信濃ナル木曾ノ棧打渡りく宿毛定又山中ノ上松里ニ着ニケリ」
とあり、常磐松文庫本・浜田本もそれに同じ。

賢茂五番綴本は「信濃なる木曾の掛橋うち渡り。く。山また山の細谷を。
わけつ、行や道芝の。露深くなる山中やあけ松の里に着にけりく」とあり(遺
形書・安藤本も同じ)、伝右衛門派とは少し異なる。

虎明本は「信濃なる木曾の懸橋打渡り、く、宿もさだめぬ山中のあげまつ
の里に着にけり」、雲形本は「信濃なる木曾の掛橋打渡り、く、乱し糸は更
科の月陰残る浅間嶽、宿もさだめぬおちこちのあげ松の里に着にけり」、狂言
集成本は「信濃なるそはの懸橋名にし負ふ。そはの懸橋名にし負ふ。乱れし糸
は更科の。月影残る浅間嶽。宿も定めぬ遠近のあけ松の里に著きにけり」とある。

この道行に関しても、春日本は独自の文句であり、しかも「播磨のいなみ野」
に着くのが特徴的である。鷺流両派はもとより、大蔵流・和泉流ともにすべて、
他の台本は「上松の里」に着く。播磨の印南野は、狂言では鬼が出現する場所
として選ばれている(「首引」「鬼の継子」、鷺流「神鳴」)。

【前シテ、所の者の有無】

春日本は、前シテが出ない。一方、アイ（間狂言）に当たる所の者は出る。これに対して、他の台本では以下のようになっている。

○享保保教本 前シテあり。所の者も出る。

○常磐松文庫本・浜田本 前シテなし。所の者が出る。

○賢茂五番綴本・遺形書・安藤本 前シテあり。所の者なし。

○虎明本 前シテなし。所の者なし。

○雲形本・狂言集成本 前シテなし。所の者が出る。

以上により、春日本は、鷲伝右衛門派の常磐松文庫本・浜田本と同じ（雲形本・狂言集成本も同じ）かたちであることがわかる。

【待謡】

春日本には、待謡がある。

扱ハ是レかうつ蟬の旧関かや いそ其跡を弔らわんと声もはるかに松かけの。く葉ことにもる、仮り枕やぶれ衣を片敷きてかのなき跡を弔らわん

享保保教本は「扱ハ蟬ノ旧跡カヤ 大悲円満無碍神呪 南無喝囉恒那哆囉夜耶」、常磐松文庫本は「扱ハ是成ハセミの旧跡かや いさ弔てうかべんと月も隈なき夜もすがらく此御経を誦誦するく 南無からたんのふトラヤンヤ引」とある。浜田本も常磐松文庫本と同じ（ただし、「月もくまなき夜もすがら」の返しなし）。賢茂五番綴本は待謡なし（遺形書・安藤本も同じ）。

虎明本は待謡なく、経文のみ。「南無きやらたんのう、とらやく、はにふとう、そこからそもこく、ほしやほろみ、余に草臥て候間、まどろまふするにて候」とある。雲形本は「いたはしや 其身ははかなき夏の蟬の、春秋しらぬ露の命、短うち夢の世を、見果ぬるこそびむなけれ 南無からたむのうとらやとらや」、狂言集成本「痛はしや其身は果敢なき夏の蟬の。春秋知らぬ露の命。短き内の夢の世を。見はてぬるこそびんなけれ。南無きやらたんのふとらやく」とある。

春日本の待謡は独自の文句である。鷲流両派、あるいは大蔵虎明本や和泉流には「南無か（きや）らたんのう」という経文（『大悲心陀羅尼』の冒頭）が必ず引かれているが、春日本にはそれがなく、いずれの流派の詞章にも重ならない。

【最期（苦患）の有様】

いでくさらハ語り申さん 日もうら、成る折節にあなた此方と飛ヒめくりて心もすみて面白きに カケリ 打切 いづくよりも知らざりしく山鳥ス飛ビ来てさもあらけなくさしくわへ手足も羽おも引きむしり。つき喰えバ妙とさげべど助る人もなかりける助る人こそなかりける シテさまくの命途の有様く 娑婆にて目なれし梢にとまれバ劔の枝にて身をさし通シ。空を飛ハ。黒金の山ぐんもの家ニ掛ツて。五たいヲスワレ苦しみひまなき身なれとも。只今御僧の御弟子と成て成仏得達うたがひあらじと。身ハ空蟬の。から衣。そろりくくとぬギ捨テく髪そり落し五かひをたもち髪そりおとして後会をたもちて。つくく法師と成りにけり

享保保教本は、「シテイテくサラハ語ツテ聞セ申サント（カケリノ時日モ長閑ナル折節ハ木々ノ木末ニ飛カケリテサモ面白ク遊シニイツクヨリモト謡）イツクヨリモ知ラサリシ鵲飛来ツテサモ情ナク差クハエ手足モ羽ヲモ引繕ツ、キ喰バメウト叫ド助者コソナカリケレく シテ数々ノ冥途ノ有様（地返シテモ） 地娑婆ニテ手馴シ木末ニ登レハ劔ノ枝ニテ身ヲ差トヲシ虚空ヲ飛ハ鉄ノ山蜘蛛ノ家ニカ、リテ五躰ヲ吸ハレ苦際ナキ身ナリシニ只今御僧ノ御弟子トナレハ成仏得脱疑アラシト身ハ空蟬ノカラ衣鼠栗く脱捨テ髪剃落シテ五戒ヲ持くツクくホウシト成ニケリ」とある。常磐松文庫本は「日もうら、かなる折節ハ心もすみて面白く彼方此方と飛廻りて カケリ 心も澄て面白きに何国よりも知らざりしく山鳥飛来りさも情なく差くわへ手足も羽をも引むしりつつつき喰らへハめふとさげべと助る人こそなかりけれく 数々の冥途の有様娑婆にて目馴し木末へに留れバ劔の枝にて身をさし通し虚空を飛べば黒鉄の山蜘蛛の家に、つて五躰を吸れ苦しミ隙なき身なれども唯今御僧の御弟子と成て成仏得達疑ひあらじと身ハうつつせミのから衣そろりくとぬきすて、く髪剃落して五戒をたもちかみそりおとし五かひをたもちてつくく法師と成にけり」とある。浜田本は、常磐松文庫本とほぼ同じ。

賢茂五番綴本は、「シテいでく左有らバ語り申候べし シテ抑。死出の山路の南原こそ是涼しき所なればとある古木にとり付て。余念なふこそ居たりけれ。や、有ツて我音をのミぞ慕ひけるが。山から数多飛来りさも情なくさしくわへし苦しミハしやうねつ地獄ハ是なるべし。ふりはなして虚空を飛ば。黒金の山蜘蛛の家に掛り。五躰をすわる、悲しさよ。娑婆にて手なれし木末を登れば。劔

寛政有江本は、①「某ハなかへはいつてをし草をして取ふ程にそなたハ岡にいてひろハしませ」、②「何程歎ひたりともゆるしハせぬぞ ちん常に討れい」と言うのみで、該当のせりふなし。杭全本は、①は、「扱某ハ中へ這入て押草と云事をして上ふ程にわこりよハ魚を集めさしませ」と言うのみ。②「尤此事を宿て知らせ度物成共常々そちハ兵法の心か有か身共無手成ば返り打ニあふてハ成まいと思ふて是迄謀て連て来た 最早逃れぬ所じや 尋常ニ覚悟せい」とある。

安政賢通本は、①「さて某は中へはいつて、押し草といふものにして上げう程に、そなたは上にゐて、魚を集めてくれさしませ」と言うのみ。②「尤もこの事をそちに知らせたうは思ふたれども、そちは常常兵法の心があり、某は無手ぢやによつて、もし返り討に逢うてはいかがぢやと思つて、これまでたばかつて連れて来た。未練な事を言はずとも、最早逃れぬところぢや。尋常に覚悟をせい。逃しはせぬぞ」とある。賢茂五番綴本は、①②ともに、安政賢通本とほぼ同じ。

大蔵流の虎明本は、①武悪は、太郎冠者にも池に入つて魚を捕るよう勧めるが、冠者は「いや身どもは、又かへつてから、おざしきへ出ねはならぬ程に、足がよごりよう、とつてあげさしめ、こゝでそれがしはひろおふ」、②「汝が云も尤なれ共、さりながらおぬしは事の外力もつよし、その上ひやうほうなどがよひ程に、たばからずはなるまひと、たのふだ人も仰付られた所で、せひもなひ、誠にほうこうする身ほどあさましひ事はなひ、きのふけふまでとうかなふした者を、しうめいとて、今せいばひする事むごひ事なれども、身にはかへられぬ所で、れうけんもなひ、とてもたすくる事はなるまひ、尋常に覚悟をさしめ、跡を念比にとふらふてやらふぞ」とある。

虎寛本は、①武悪は、太郎冠者にも池に入つて魚を捕るよう勧めるが、冠者は「イヤ、身共は戻ると其儘御前へ出ねば成らぬ程に、足をぬらいては成らぬ。和御料斗りはいつてとらしめ」と言う。②宿で知らせたら妻子に名残惜しかろう、「日頃心得た者」なので、たばかつて討つと言う。山本東本・茂山真一本、八右衛門派の虎光本も、①②ともに、虎寛本とほぼ同じ。

和泉流の天理本は、①川に着いてから、「武悪」太郎くわじやに「うお、おへ」と云、(冠者)「こゝろへた」と云、「冠者も川へ入るのかどうかは不明。②「われもさうは思へ共、御意なればちからをよばぬ」と云てなく」とある。和泉家

古本は、①「シテ」おぬしも跡から声をかけてたもれト云 太郎「心得たト云」とあるのみ。②「其事しや・身共も宿て云てきかせたうはあつたれ共・妻子かあとさきてなけかは・さしものおぬしも取みたさうとおもふてたはかつてきた。せひもないとおもふてしんしやうにきられいト云」とある。

古典文庫本は、①武悪は、太郎冠者にも池に入つて魚を捕るよう勧めるが、冠者は「成程易い事ぢやが某は川へはいる事は不得手な 上から声をかけう」と言う。②「夫も身共が合点なれ共宿て此事をしらせたらは妻子に名残を惜ミ最期を取乱さうと思ふて不憫なれどもたばかつて連て来た 兎角遁れぬ処ぢや 覚悟せい」とある。

狂言集成本は、①武悪は、太郎冠者にも池に入つて魚を捕るよう勧めるが、冠者は「身共も這入つて。追うてやりたれども。今にも御前から召せば。濡足では上られぬ。上から声をかけてやらうぞ」と言う。②古典文庫本とほぼ同じ。狂言記は、①「川狩」に出て、武悪は冠者に「あ、身が草寄せといふ事を知つておじやるほどに、さあく、その方から追ふてくれさしめ」と言う。冠者が川に入るのかどうかは不明。②「そなたが嘆きやるのをば思ふては、今日は人の身の上、明日はわが身の上、世の中に宮仕いなどをせう物ではない」とある。

鷺伝右衛門派の宝暦名女川本では、①において、武悪が太郎冠者を気遣い（主人の御前に出るため、足が汚れてはいけない）、自分が生簀に入ると言うのが特徴であり、そのことは春日日本と共通する。

それに対して、鷺仁右衛門派・大蔵流には、そのような気遣いのせりふがない。和泉流も同様で、特に、古典文庫本・狂言集成本は、太郎冠者の方から池には入らない旨を言う。なお、狂言集成本において、太郎冠者自身が「御前へ出るので足を濡らすわけにはいかない」と言うところは、大蔵流に近い。

また、②では、宝暦名女川本に「兵法立て」「無手」「はんくわひ」という表現が見え、それらは春日日本と共通する。寛政有江本以外の鷺仁右衛門派にも、「兵法」「無手」という言葉は見えるが、「はんくわひ」は見当たらない。大蔵流諸本は、虎明本に「兵法」が見えるが、「無手」「はんくわひ」はない。和泉流諸本は、おむね「宿もとでは、妻子への未練があるかと思つてたばかった」と言い、武悪の兵法立てや冠者自身の「無手」には触れない。なお、この春日日本と宝暦名女川本の②に共通して見える「半海（はんくわひ）」（傍線部）という

言葉は、「少しでも」の意かと考えられるが、用例は未見である。大方のご教示をお願いしたい。

【太郎冠者の作り話（武悪の最期）】

武悪を討つことができなかった太郎冠者は、主人の前では見事に討ち果たしたと言う。

キヤツハ常々兵法立ておもしろ 私ハ無手也り 所全し（ツツ） こんじて此方まで
の御がひけいニも成ると存御太刀をこうかくしましてヤイ武悪出いと申て
御座れハさすが武悪ほとアツテ心得たりと飛ンテ出る所ヲおつびらいて
口伝 づていどうと切り付けて御座るがさながら水の中江切り入る如く御
太刀かよふ切りました御座る

宝曆名女川本は、「あれへ参つて、武悪御意じや、かくこせひと申て御座れば、日比の口を聞程御座りまする、心得たと申て飛てずる所を、おつひらいて大げさに打をとひて御座るが、只水の中へ打こむよふに腕（ツツ）に覚が御座りませなんだ」
（主）「あいつは日比へひほうだてをする、そちは無手なり、しぜん打そのふては某の外分迤いかゝと思ふて居たが、扱は成敗したか」とある。

寛政有江本は、「随分能御座りました 上意しやと申て御座れば院爾（ツツ）と咲て討れました御座る」と、遊山に行く途中で言う。杭全本「其御事でござる 武悪御成敗と申てござれば心得たと申て飛で掛所を引はついて大けさニ打放ましてござる」と、東山へ行く途中で言う。安政賢通本は、「武悪成敗と仰せ出だされたと申してござれば、心得たと申して飛んでかかるを、引つばづいてほうど大袈裟に打ち放しましてござる」「武悪は常常兵法の心がござり、私は無手でござるによつて、随分たばかつて易易と打ち放しましてござる」と、東山辺へ行く途中で言う。その後、武悪に出会って気味が悪くなった主人は帰ろうとし、その途中で太刀の切れ味を太郎冠者に問う。冠者は「さすがお太刀でござる。水の中へ打ち込もうで、手に覚えがござりませぬ」と言う。賢茂五番綴本もこれにほぼ同じ。

大蔵流の虎明本は「ぶあくが事は、日比私もぞんじてござり、又たのふだ人も、あれはふ断心がけたものじや、すこしなりともその様子が見えたらはわるからふほどに、だまひて油断をいたすなと仰せられて御さるによつて、色々にだましまらして、川うをとつて上よと申て、川へおつこふできつてござるが、思ひのほかなんのさうさもなふ、一刀にてしとめて御さる」私も内々聞及ふ

ではござれ共、是ほどにござらふとはぞんぜんだが、ちつとも手におほへもなふ、水の中へうちこようだやうな手の内で御ざつた」とある。

虎寛本は「私もぬかる事では御座らぬ。溝川へはつこふで、たばかつて打まして御座る」「御太事に被成ませいは。唯水などへ打こふだ様に、手の内におほへが御座りませぬ」、また、東山へ行く途中で、「さすがは日頃の口ほど御座つて、首さしのべて尋常に討れまして御座る」と言う。虎光本・山本東本もほぼ同じ。茂山真一本もほぼ同じであるが、「何が、水の中へ折れ込もうで、さらに手のうちに覚えがござらぬ」と言う。

和泉流の天理本は、「ぶあくが申事は、扱く、ゆへもない事に、かやうに御せいはいなさる、せひにおよばぬ、それがしこそほうこう故に、かやうにおうせつけられるれ、かまへて太郎くわじやは、よふ御ほうこうをめされいと云て、西にむかひて念仏四五へん申て、じんじやうにきられて御さる」とある。和泉家古本は、「しんじやうにきられて御さるト云テ・ぶあくか申は・ふほうこうゆへにかやうに御せいはいなさる、せひにおよばぬ・それかしこそかやうに仰せ付られるれ・かまへて太郎くわじやはよふ御奉公せい・お目のあいたお主しや程にと申て・西にむかひ念仏四五へん申所を・御重代をぬいて水もたまらず打はないて御さる」とある。

古典文庫本は「ハアさすがに武悪でござります あれへ参り御意で討に来た覚悟せいと申てござれば身から出た錆なれば誰恨むる者もないと申て西に向ひ合掌し念仏四五遍計唱へます処を何がお太刀ではござり水もたまらず首打落しましてござる」、（東山へ行く途中で）「何がお太刀でござるに依てまつた、水へうちつくる様にござりました」と言う。

狂言集成本は「先づあれへ参つて。御意で討ちに来た。覚悟せいと申して御座れば。先づかうあらうと存じたと申して。西に向つて念仏十遍ばかり申す処を。何がお太刀で御座る。水も溜らず。首をてうど打落して御座る」、（東山へ行く途中で）「流石お太刀で御座る。まつた、水の中へ打込む様に御座りました」と言う。

狂言記は「きやつは手者と思はつしやれませひ、又身どもは何にも存ぜぬ者の事で御ざれば、だまさはなるまひと存じ、傍輩衆のおつしやる、殿の御前へ言ひ直そうほどに、殿も川狩に出さつしやるほどに、そなたも急いでお出やつたらよかるうと申て御ざれば、それをついでに言ひ直してくれうとおつし

やる事かとて、嬉しがつて、何が川へ出まして、深ひ所で草寄せを致します所をば、身どもが此お太刀でもつて、何が御ざらふぞ、水もたまらず、ぶち放して御ざる、さてもく、よう切れる御太刀で御ざる」と言う。

宝曆名女川本の表現（傍線部）は、春日本に類似する。鷺仁右衛門派は、太郎冠者が武悪を討った様子を、東山へ行く途中で主人に言うのが特色である。ただし、武悪が「心得たと、飛んでかかる」という共通の表現はある。大蔵流は、たばかつて討ったことと、太刀の切れ味を言うことが特徴であるが、太刀の切れ味を水中に打ち込むようだとするのは、鷺流両派に共通し、春日本にも類似している。また、和泉流の古典文庫本・狂言集成本にも共通の表現が見える。和泉流は、覚悟を決めた武悪が西に向かい、念仏を唱えたとするくだりが特徴的である。狂言記はやや詳しく経緯を語り、「水もたまらず、ぶち放して」という表現は、大蔵流に近い。

【武悪自身が幽霊になることを発案する】

春日本では、次のように、武悪自身が幽霊になって出ることを思いつく。

武「イヤ思ひ出した「何事しや」「イヤにわせまいが武悪かゆうれいとナツテ今一度御目見えは何ニとて有ふか

宝曆名女川本は「シテ「漸漸爰は鳥部野、他りじやに由て、にはせまいが武悪が幽霊で御座るなど、云て、も一度御目にか、つては何とあらふ」とある。

鷺仁右衛門派は、寛政有江本「武悪」是ハ鳥辺野しや程に似ハせま^ツけれとも不悪か幽霊しやなど、云て又ちよつと御目ニ懸てハ何とあらふ」、杭全本「武悪 折節爰ハ鳥辺野じや程ニ似ハせまいか若シ武悪か幽霊杯と云ておめニ掛つた成ばお疑の晴る、事もおりやろうか是ハ何とでおりやろふ」、安政賢通本「シテ折節ここは鳥辺野なれば、似はせまいが様を変へて、武悪が幽霊でござるなどと言うて、今一度御目にかかつたならば、お疑ひの晴るる事もあらうか。これは何とおりやらうぞ」とある（賢茂五番綴本も同じ）。

大蔵流は、虎明本「太郎冠者」「あんじ出た事が有る、爰はとりべのぢかくじやほどに、ゆうれいじやといはふ程に、一たびお目にか、つてくれさしめ、さなくはいちごうたがはれう程に」とあり、以下、虎寛本・山本東本・茂山真一本、八右衛門派の虎光本に至るまで、すべて太郎冠者が発案して、武悪に幽霊になるよう勧める。

和泉流の天理本は、「太郎冠者」行て、ぶあくをしかる、シカく、其時、い

うれいのまねをする」とあるのみであるが、和泉家古本は、「太郎」シアンシテ。幸爰は鳥部野しや・とうそいうれいのやうにしててよ」と言う。以下、古典文庫本・狂言集成本も、大蔵流同様に、太郎冠者が武悪を幽霊に仕立てることを思いつく。狂言記もそれに同じ。

以上の通り、大蔵流・和泉流、狂言記は、いずれも太郎冠者が、武悪に幽霊になるよう提案する。これに対して、鷺流は仁右衛門派・伝右衛門派ともに、武悪自身が幽霊になることを思いつくのが特色である。また鷺流では、両派にわたって、「似はせまいが」という特徴的な表現が認められるが、それは春日本にもある。従って、春日本の行き方は、鷺流両派のそれと一致する。

【武悪が幽霊となって出るまでの主人と太郎冠者のやりとり】

武悪が幽霊になって出ることになり、知らぬ顔で主人のもとへ戻った太郎冠者は、「武悪に似た者は誰もいなかった」旨を報告する。そして不審に思った主人の間でやりとりがあるが、春日本ではそれらのせりふに特徴がある（傍線部）。

「イヤあれ江参りらんとふ原の辺りを右江左江とおしわけ尋ねましたか武悪にいた者も居りませぬ」「惣ウで有ウ 身共此辺りから見れハ高見から

で蟻のとわたりまでも見ゆるか武悪ニにた^マたた者もおらぬか今のハ何ニ有ふぞ 太「何をかな見させられた者で御座りませぬ」「キヤツニ親は有

か「是ハはやみかりました」「兄弟は有るか」「イヤ是も式入りおりましたみな身まかりました」「いとこは有るか」「是りや御座りませぬ」「いと

子があらばいと子にと言ウ事も有ふがすれば今のは何ニ有ふぞ

宝曆名女川本は、「太郎」中々、あれへ参つてらんとうのまわりを草をかきわけく見て御座るが、人は見へませぬ、（中略）主「そふあらう、此たかみから見をろすに蟻のほう迄みゆるが何も見へぬ、太郎「左様で御座ります、主「が、今の程まざくと不安久にいた者は有まひぞ、太郎「はて合点のゆかぬ事で御座るます、主「きやつに親はなひか 太郎「い、や御座りませぬ、主「兄弟はなひか、太郎「兄弟も御座りましたが是も果まして御座る、主「いとこはなひか、太郎「いとこは御座りませぬ、主「いとこなどがあればいとこにと云てにる者じや」とある。

常磐松文庫抜書本（主人のせりふのみ）は、「某も此高い所から見おろすに蟻のはふ迄が見ゆるか武悪に似た者ハ見へなんだ」「でも又今の程武悪に似た

者はないが「ヤイ武悪の親ハないか」「何じや果た ムウ兄弟ハ」「従弟ハ何と有」「いとこが有バ従弟似杯といふて似た者もある物じやが汝ハ何ぞ思ひ当事ハ無か」とある。

寛政有江本は、「太郎冠者 其儀て御座ル 草を分て尋ねましたれとも生物とてハねつミ程のもの見えませぬ (主人) 此の高所より見卸しても何んにも見えぬ 今の様に不悪に似た事ハ有まいか 兄弟ハなかつたか (太郎冠者) いや、何にも御座らぬと承た、杭全本は「太郎冠者」中々爰の石燈籠のかけ草を分てさがいてこされ共生類と申てハ鼠程の者もおりませぬ (主人) 爰と此高い所から見下ろす二蟻の這ふ迄か見ゆる二不思議なことじや (中略) 主人はここが鳥辺野だと気付いて気味が悪くなり、帰ろうと言う。その途中で (主人) ヤイ奴か兄弟ハ無か (太郎冠者) 兄弟ハこさりませぬ (主人) 親類ハ無か (太郎冠者) 親類迎もこさりませぬ」とある。安政賢通本は「太郎冠者なか。あそこの卵塔の蔭ここの石塔の間、草を分けて見てござるが、生類とては鼠程の物も居りませぬ。主何ぢや。生類とては鼠程の物も居らぬ。太郎冠者なか。主まことこの高いところから見下すに、蟻の這ふまでが見ゆるが、何も居らぬか合点の行かぬ事ぢや。(中略) 主人は気味が悪くなり、帰ろうと言う。その途中で) 主やい。武悪に親類は無いか。太郎冠者いや親類はござりませぬ。主兄弟は無いか。太郎冠者兄弟とてもござりませぬ。主無い。太郎冠者なか。主はさて世にはよう似た者がある。武悪にそのままであつた」とある (賢茂五番綴本もほぼ同じ)。

大藏流の虎明本は「太郎冠者) あれへ参見て御ざるが、御ぞんじのことく、あのやぶはなより見まらずれば、かゝるのとぶまでも一目に見えまらずるが、人かげもござらぬ」、虎寛本は「太郎冠者) あの高い所へ上て見ますれば、蟻のはふ迄も見へますが、武悪が事は扱置、人影も見へませぬ」とあり、山本東本・茂山真一本、八右衛門派の虎光本もそれとほぼ同じである。

和泉流の天理本には、該当するせりふがない。和泉家古本は天理本と同じで、今のは武悪の幽霊であろうと言うのみ。古典文庫本は「あの高ミへあがつて見ますれば五町三丁は手の下に見えますが武悪が事ハおきまして人影も見えませぬ」とあり、狂言集成本もほぼそれに同じ。

狂言記は「申殿様、御ざりまするか、いまのは武悪がやうに御ざりましたが、追つかけて参ると、見失いまして御ざる」とあるのみ。

春日本の「らんと(卵塔)原」の辺りを探すと、「蟻のとわたりまで見ゆる」という表現はかなり特徴的である。また主人が、武悪の兄弟や従兄弟の存在を冠者に尋ねるくだりも特色といえよう。鶯伝右衛門派の宝暦名女川本・常磐松文庫抜書本には、まさしくそれと同じか、または似た表現が認められる (「蟻の這ふまで (が) 見ゆる」と言う。常磐松文庫抜書本には、「卵塔」の辺りを探すことはなし)。

これに対して、鶯伝右衛門派は、特に安政賢通本・賢茂五番綴本に、「卵塔」「蟻の這ふまでが見ゆる」という表現、また兄弟・親類について尋ねるくだりが見え、伝右衛門派と共通しているように見えるが、後者の兄弟等に関するやりとりは、気味が悪くなった主人が帰ろうとして、その途中ですることになっており (従兄弟を尋ねることはなし)、そのところは伝右衛門派及び春日本と相違する。

大藏流は、おおむね「蟻の這ふまで見ゆる」と言うが、「卵塔」の辺りを探すことや武悪の兄弟・従兄弟を尋ねるくだりが無い。和泉流は古典文庫本・狂言集成本ともに、「卵塔」「蟻の這ふまで見ゆる」という表現は見えず、兄弟・従兄弟を尋ねることもない。狂言記は「追い掛けたが見失つた」と言うのみである。

以上により、春日本のこの部分は、鶯伝右衛門派の特色を備えており、特に宝暦名女川本に最も近いといえることができる。

【幽霊に扮した武悪の登場】

武悪は幽霊になりすまして、主人と太郎冠者の前に現れるが、その時に、春日本では特異な演出があつた。その部分の演出注記を次に示す。

武悪黒ダレ白八巻白ねりハハリ竹杖カツギユラユラ出ル 主見ルゆへ太郎冠者ハシリカ、リツキタラシかくす 主ハ見ウトスル 口伝

すなわち、黒垂・白鉢巻に白練を羽織つた武悪が、竹杖を担いで「ゆらく」と登場する。主人がそれを見るので、太郎冠者は走り掛かって武悪を突き倒し隠す、というのである。なぜ、ここで冠者が武悪を突き倒す必要があるのか、一見分かり難い。幽霊であるので、本来は竹杖を突いて出なければならぬところ (賢茂五番綴本には「シテ竹杖ツキ腰ヲカ、メブルノトフルイソロノ出ル」とある) を、肩に担いで (ゆらくと) 出たため、「幽霊らしくせよ」と咎めるためかと解される。しかし、主人が見ているところで、冠者が (幽霊であるはずの) 武悪を突き倒したりすれば、二人の共謀が露顕しかねない。そ

のあとに、「かくす」とあるものの、不審は残るのである。

ともかく、ここで冠者が、幽霊となった武悪を突き倒し隠すという所作は、鷺流両派はもとより、大蔵流・和泉流の台本、さらには狂言記にも全く見当たらない。

この曲で、冠者が主人の目から武悪を隠すことは、通常はこれより前、武悪が清水寺の観音にお礼参りすると、太郎冠者を供に連れた主人と鉢合わせする場面にある。太郎冠者が武悪を「突き倒し隠す」という所作は、そちらの場面の方がよりふさわしいはずである。例えば、鷺伝右衛門派の宝暦名女川本では、「シテ」：扱もく、忝ない事かな、と云ながら出て、主に行会て其ま、にけて橋か、りへ行、かみている、出会時、太郎官者はかくす躰をする」とあり、鷺仁右衛門派の賢茂五番綴本でも「シテは）主ヲ見テ橋懸リへ逃来ル主モシテヲ見ルト太郎中へ入り両袖ヲヒロケ隠ス」とある。その他大蔵流・和泉流においても、ここで（突き倒すことはしないもの）冠者は主人の前に立ちふさがって、その視線をさえぎり、必死に武悪を隠そうとするのである。

春日本では、そちらの場面には、「口伝 主誠にたまげた気色 太郎とふわつてい（当惑の体）」という注記があるのみである。もし、ここで隠す所作がなかったとすれば、それはそれで他に例のない演出ということになる。

また一方で、右に述べたように、幽霊となった武悪を冠者が突き倒し隠すというのも、他流・他派の台本には全く見えない春日本独自の演出である。ただし、「主見ルゆへ太郎冠者ハシリカ、リツキタヲシかくす」という注記が、その前の鉢合わせの場面にあるべき注記の混入（勘違いによる誤記）である可能性もあながちに否定できない。そうした可能性を残しつつも、この部分は、他の伝右衛門派台本には見えない（そして他流・他派にもない）、春日本独自の演出であると見ておきたい。

【主人から巻き上げる物】

幽霊となった武悪は、あの世にいる先代の言づつと称して、主人から様々な物を巻き上げる。春日本では、次のようである。

①扇子（修羅の炎で暑い）・②太刀（戦いの折に太刀が折れた）・③刀（お差し替えも要る）

宝暦名女川本は「①太刀（修羅道の合戦で太刀が折れた）・②刀（おつきあいが繁く、お差し替えが要る）・③扇（地獄の炎で暑い）」であり、常磐松文庫抜

書本も同様である。

寛政有江本は「①太刀（修羅の苦患で太刀が損ねた）・②刀（お腰の物も損ねた）・③扇（暖気のため）」。杭全本は「①太刀（夜に三度日に三度の合戦に太刀が損ねた）・②刀（切々の御参会にお差し替えが要る）・③扇（暖国ゆえ）」であり、安政賢通本・賢茂五番綴本もこれに同じ。

大蔵流の虎明本は「①太刀、刀（夜に三度昼に三度の合戦に太刀も刀も折れた）・②扇（寄り合いの際暑い時分に扇もない）」、虎寛本は「①太刀、刀（修羅道の戦いに太刀も刀も折れた）・②扇（殊の外暑い）」であり、山本東本・茂山真一本、虎光本も虎寛本に同じ。

和泉流の天理本は「①扇（夏向きに要る）・②太刀・③刀・④上下」、和泉家古本「①扇（謡がはやる）・②刀（閻魔俱生神への出仕）・③太刀（盗人がはやる）」である。古典文庫本は「①太刀（盗人がはやる）・②刀（閻魔王への出仕）・③扇（謡がはやる）」（狂言集成本も同じ）となっている。狂言記は、「①太刀（閻魔への出仕）・②素袍袴、扇」であり、素袍・袴まで巻き上げるのは、天理本の「上下」と共通であり、古態の演出といえよう。

春日本の順序は、鷺流両派とは異なる独自のものである。ただし、それぞれの品がなぜ必要かという理由については、鷺伝右衛門派に近い。また、扇を真っ先に巻き上げることは、和泉流の天理本・和泉家古本と一致するが、それらは「謡がはやる」という独自の理由付けとなっており、それに関しては春日本と一致しないのである。

以上により、春日本「武悪」は、詞章の細部の表現を含め、鷺伝右衛門派の宝暦名女川本に最も近いといえる。ただし、幽霊に扮した武悪の登場や主人から巻き上げる物の順序については、鷺流両派とは異なる独自の演出が認められるのである。

18、「隠シ狸」

ここからは、「隠シ狸 他」（山口県立大学附属郷土文学資料センター蔵）所収曲についての考察となる。本曲は、鷺流、特に伝右衛門派では「珍敷狂言」としての扱ひであった。鷺仁右衛門派とおぼしき別習鷺流狂言本⁴には、「狸売」の曲名で収められている（含翠堂文庫本にもあるが未見）が、伝右衛門派の台本は、現在のところ、（この春日本以外には）長府伝承本である浜田本しか見

当たらない。

【主人は酒を携えて市に行く】

春日本では、主人は始めから酒樽(葛桶)を持って市へ行く。

さいぜん太郎冠を市江つかわせて御座るかキヤツは酒を一ツすごすとかくす事もみなうち明けて申すによりさ、へを持つツテ向ヒがてらに参ツテ見よウト存る

浜田本は、「いやあいつハ日頃酒を好みまする 一ツたべますと隠す事をもつて申するに依而さ、へを持参致て一ツ呑せて問落ふと存る」とあり、注記に「腰桶ヲサゲ行ナリ」とある。

これに対して、別習鷺流狂言本(「狸売」)は、「去ながら市へ出てハ只帰らぬ者じやといふ。其上気晴に一ツ呑ふでもとらふ 酒を調べてこい」とあり、市場で酒を調える。

一方、和泉流の古典文庫本では、「彼奴ハ酒さへ飲すれハ吾を忘れて何事をも申す程にさ、えを用意して市へ参り問落さうと存る」とあって、主人は市へ酒を持参する(葛桶を持つ)。狂言集成本(新編狂言正本)も同じく、「きやつは酒を一ツ飲ますれば。隠す事も有り様に申す。今日は市へさ、えを持つて参り。様子を見うと存ずる」とあり、主人は酒を用意する(葛桶はなし)。

狂言記外五十番は「市酒飲まふ、酒を買いに行て、取つて来い」とあり、市で酒を調える。天理堀村本(天理図書館蔵『狂言 大外』)も「余り待久しい酒を飲う程買てこい」とあって、それに同じ。

つまり、最初から主人が酒樽を持って行くのは、春日本・浜田本、そして和泉流の古典文庫本・狂言集成本である。市へ着いてから酒を調えるのは、別習鷺流狂言本、狂言記外五十番・天理堀村本である。春日本の行き方は、仁右衛門派とは異なる(和泉流とは共通である)ので、これは鷺伝右衛門派の演出と考えてよいのではなからうか。

【酒盛りでの太郎冠者の舞】

春日本では、太郎冠者はまず「鉢木」を坐ったまま舞い、次に「山姥」のキリを主人と相舞する。浜田本も同様である。

別習鷺流狂言本は、太郎冠者がまず「目度度かりける時とかや」と謡い、舞う。注記に「笛ニテ舞フ」とあり、三段の舞になるのである。次に「喜に又よろこびを重ねつ」と謡い、舞う。最後に「主喜に シテ又よろこびを重けり」

と謡い、主人と相舞になる。後ろを隠すことといい、これは「二人袴」の演出の取り込みと考えられる。

和泉流の古典文庫本は、小舞「兎」から「道明寺」となる。狂言集成本(新編狂言正本)は、小舞「兎」を舞い、狸を捕る話をした後に、「鵜飼」「兎」の順で舞う。

狂言記外五十番は、小舞の詞章を記さない。天理堀村本は、一度目、二度目は「舞」とあるのみで、小舞の詞章は記さない。最後に「暁の明星」を主人と連舞で舞うことになる。

太郎冠者が「山姥」を主人と相舞で舞うのは、春日本(及び浜田本)独特の演出である。鷺流では、小舞に「山姥」があり、その詞章はまさしく能「山姥」のキリそのものである。別習鷺流狂言本は、前述の通り、三段の舞を舞うのであり、全く異なっている。「山姥」を舞うことは伝右衛門派独自の演出といえるかもしれない。

以上、比較すべき鷺伝右衛門派の台本が浜田本以外に見当たらないため、十分な考察ではあるが、春日本は、明らかに鷺伝右衛門派とは相違している。であり、浜田本とともに、鷺伝右衛門派の「隠狸」のかたちを伝えるものと推測される。本曲もまた、鷺伝右衛門派独自の詞章・演出が備わっていたのである。

19、「八句連歌」 20、「清水」 21、「栗焼」(『隠シ狸 他』)所収

すでに考察を終えているので、省略する。いずれも先に考察した台本(『狂言手附本 二』または『同 三』所収)と大異なし。

22、「土筆」

【前半の場面】

春日本では、シテ(男甲)がアド(男乙)を遊山に誘いに行き、連れ立って「原」へ出る。そこで土筆を見つけることになる(春日本は、シテ・アドの役名表記が乏しいが、その乏しい表記を手がかりにすると、一応そのように解される。以下についても同じ)。鷺流両派もそれに同じ。大蔵流も同じである。狂言記外五十番(『歌相撲』)は、二人の男にそれぞれ「平八」「孫一」という名が与えられており、いずれがシテとも分からないが、平八が孫一を誘いに行き、ともに野へ出る。

ところが、和泉流（「歌争」）は、天理本以来、アドがシテを野遊びに誘いに行くと、シテが自分の庭の芍薬が盛りだと言うので、まず庭でそれを見てから野辺に出ることになっており（従って、詠まれる歌（発句）の順序が違う）、鷺・大蔵両流とは場面展開が大きく異なっている。

以上により、春日日本は、鷺流両派（大蔵流も同じ）の行き方に一致しているので、鷺流のかたちであると認められる。

【歌・発句の詠み手】

春日日本では、野で土筆を見つけ、その土筆について、アドが「一首うかうだ」として、次のような歌（発句）を詠み、シテに笑われる。

①「春の野に」「く」「土筆の首しほれてぐんにやり

その後、今度は芍薬の花を見つけて、シテが次のような歌を詠み、今度はアドに笑われる。

②なにわづにしやくやくの花冬籠り今を春部としやくやくの花

これらの珍妙な発句（にもなっていないが）、歌については、『醒睡笑』などに見えており、連歌咄との関連がすでに説かれているが、ここではその詠み手に注目したい。春日日本では、右のように、①をアド、②をシテと、それぞれ別人が詠むことになっている。

享保保教本は、①シテ（春野、ニ土筆ノ首塩折グンナリ）、②アド、宝暦名女川本は、①アド（春の、に、つくづくしのくびしをれてぐんなり）、②シテ、常磐松文庫本は、①アド（春の野につくづくしの首しおれてぐんなり）、②シテの順である。

鷺仁右衛門派では、寛政有江本は、①（春の野につくくしのいでくひしほれくんなり）、②の順であるが、役名を記さないで、分担は不明である。二首とも同じ人物が詠んだ可能性もあろう。賢茂五番綴本は、①シテ（春の野につくくしほれてぐんなり）、②アドの順である。

大蔵流では、虎明本は、①シテ（つくくしのくびぐんなり）、②アドとなっており、大蔵八右衛門派の伊藤源之丞本（①「つくくし、しをれてぐんなり）・虎光本（①「土筆の首しほれてぐんにやり」）も、句の表現は少し異なるが、詠み手の分担は、虎明本に同じ。虎寛本は、①（つくくしの首しほれてぐんなり）②ともにシテが詠む。ただし後記に「難波津の歌をアドの方にて云てもするなり」とある。

和泉流では、天理本は、まず庭で芍薬を見てから、野辺に出て土筆を見るので、②アド、①シテ（春の野に、つくくしの首、しほれてぐんなり）の順で詠むことになる。和泉家古本・古典文庫本もこれに同じ。狂言集成本も同じであるが、①は「春の野に。土筆しほれてぐんなり」とある。

狂言記外五十番は、①平八（つくくしの首しをれてぐんなり）、②孫一の順になっている。

鷺伝右衛門派の中でも、享保保教本は、①シテ②アド、宝暦名女川本・常磐松文庫本は、①アド②シテという順序・分担であり、①はすべて「春の野に土筆の首しおれてぐんなり」というかたちである。鷺仁右衛門派は、寛政有江本は分担が不明であるが、賢茂五番綴本は、享保保教本と同じく、①シテ、②アドという分担になっている。ただし、①は伝右衛門派と比べて表現に小異がある（「土筆」の「首」を欠く。和泉流・狂言集成本もこれに同じ）。大蔵流は、虎明本・伊藤源之丞本・虎光本が①シテ②アドとなっており、虎寛本は、①②ともシテが詠む。また、いずれも①に「春の野に」の句を欠くことが共通する。この①に「春の野に」を欠くことは、狂言記外五十番も同様である。

和泉流は、シテ・アドの分担はともかく、すべて②①の順であり、「春の野に」は存するものの、基本的に順序と場面設定（先述の通り）が鷺・大蔵両流とは異なっている。

以上により、春日日本は、鷺伝右衛門派、特に宝暦名女川本・常磐松文庫本に一致していることが明らかである。

【証歌の引き誤りの有無】

春日日本では、アドが①を詠むと、シテが笑うので、アドは「ア、是々哥のことばニはくんやりと言ウ事段々と有るぞや」と言うが、特に証歌を引くことはない。シテはそれに対して、「夫レハ事によつたならばない事も有まい先ツぢんかしよふの哥なそに我か恋は松を時雨のそめ兼て聞かずか原に風さわぐなりとハあれ共此方の様にくんやり」と慈鎮和尚の歌を（正しく）引いた上で、嘲笑するのである。

鷺伝右衛門派の享保保教本は、シテが①を詠み、アドが笑うと、シテは「グンナリト云事ハ古哥ニモ有ルカ知ヌカ」と言い、「我が恋ハ松ヲ時雨ノ染カ子テ真葛原ニ風サハグンナリ」と間違えて引く。それに対して、アドが正しく引いて（「風騒ナリ」）、シテを嘲笑する。宝暦名女川本は、アドが①を詠むと、

それをシテが笑い、「…其上此哥は身共のようしつてゐる、慥タシカ、慈鎮ジチンクハセウ和尚の哥じや、我が恋はまつをしぐれのそめかねて真葛原に風さわぐなり、とこそきいたれ、なんじや、あのぐんなり」と言うのであり、アドによる証歌の引き間違はない。常磐松文庫本は宝曆名女川本に同じ。

鷲仁右衛門派の寛政有江本は、①に対して、相手が「扱々其方ハ云たり〜」此証哥ハ我恋ハ松を時雨に染かねてまくつか原に風さわぐなりとこそあれ首しほれてくんなり 扱々おかしし事しや」と言い、①を詠んだ者が証歌を引き間違えることはない。賢茂五番綴本は、①を詠んだシテが、アドが笑うのを受けて、「正マダ哥のない事ハ読ハ致さぬ」と言い、「辱シチツクハセウも慈鎮和尚の哥に。我恋ハ松を時雨の染兼て。まくずが原に風さハぐんなり」といふ哥が有ルに依て読ふて御座る」と証歌を間違えて引く。それに対して、アドが「風さわぐなり」と正しく引いて笑うのである。

大蔵流の虎明本は、シテが①を詠むとアドが笑うので、シテは腹を立てて「風さはぐんなり」と引き間違う。アドがそれを正す（「風騒ぐなり」）せりふは記載されていない。虎寛本は、虎明本と同じかたちで推移し、シテが証歌を引き間違うと、アドは慈鎮和尚の歌を正しく引いて、シテを笑う。伊藤源之丞本・虎光本もそれに同じ。

和泉流の天理本は、野へ出てから①をシテが詠み、アドが笑うと、シテは「古哥にある」として、「わがこいは…かせさわぐんなり」と引き誤る。アドは「それはかせさわぐなりでこそあれ、ぐんなりとはきかぬ」と言つてさらに笑う。和泉家古本・古典文庫本・狂言集成本も基本的に同じ。

狂言記外五十番は、①を詠んだ平八が、孫一が笑うので、「ぐんなりは昔もあつた事じや、「真葛が原に風さはぐむなり」といふ名歌も有ぞ」と引き間違う。孫一は「風さはぐなり」とこそ言へ、ぐんなり〜」とまた笑う。

以上の通り、鷲仁右衛門派の享保教本、鷲仁右衛門派の賢茂五番綴本、さらには大蔵流及び和泉流諸本・狂言記外五十番では、いずれも①を詠んだ者が、証歌として慈鎮和尚の歌を「…風さはぐんなり」と間違えて引き、相手にそれを「風騒ぐなり」だと訂正されて、さらに笑われることになる。

それに対して、鷲仁右衛門派の宝曆名女川本・常磐松文庫本（仁右衛門派の寛政有江本も。ただしこれはせりふの脱落の可能性もあろう）は、①を詠んだアドが証歌を引き誤ることはなく、シテが正しいかたちを引いて嘲笑する。こ

れはまさしく春日本と近似する。春日本は、この部分に関しては、鷲仁右衛門派の中でも宝曆名女川本・常磐松文庫本にかなり近いのである。

【結末】

春日本では、歌争いから相撲になり、一方（シテであろう）が倒されるが、「ア、イヤ〜今の角力ハ式ツじや〜」と言って、もう一番取ろうとする。相手もそれに応じ、「夫レならば入かわりにして今一度とろふ」と言い、

「先ツ御まぢやれ ジイヒー 土俵ヲシルス形チ 「イヤ是が横幣フ、ヘイ帛の心でおりやるぞや」「がてんしや（以下欠）

と土俵を地面に描いて、これから今一番取ろうというところで、以下の詞章を欠いている。おそらくもう一番取るのであろうが（勝敗は不明。またシテが負けるか）、これはやや特異な行き方である。享保教本・宝曆名女川本・常磐松文庫本は、いずれも相撲を一番取つてシテが負けるところまでは同じであるが、その後相撲を取ることはなく、負けたシテがアドを追い込んで、終曲となる。寛政有江本は、結末について「スモフヲ取追込也」と記すのみであるが、一番だけ取つて敗者が勝者を追い込むのである。賢茂五番綴本は「相撲飛越同断」とあるので、同本「飛越」を参照すると、やはり相撲は一番だけ取り、シテが負けて、そのままアドを追い込むかたちである。

大蔵流では、虎明本は「さてすまふになり、あどうちたおひて、入なり」と簡略な記述のみである。アドが（シテを）倒すのか、（シテが）アドを倒すのか、あいまいではあるが、相撲は一番のみなのであろう。虎寛本は、アドがシテを倒し、シテが「すまふは三番の物じや」と言つて、アドを追い込む尋常なかたちである。伊藤源之丞本・虎光本もそれに同じ。和泉流の天理本は、アドがシテの「ぐんなり」を笑うと、シテが「そちの身の上にも、おかしき事があらうぞ」と、四条河原で相撲があつた時に、アドの男が小男に負けて笑われたことを引いて嘲笑する。その後、相撲を取り、シテはアドに倒され、アドを追い入る。四条河原の相撲のくだりは、同流「飛越」に同じである。和泉家古本・古典文庫本・狂言集成本も基本的に天理本に同じである。狂言記外五十番は、和泉流のような河原相撲の話はなく、平八が孫一を倒し、孫一が「今一番取れ」と平八を追い込む。

春日本の相撲を二番取ろうとする結末は、地面に土俵を描いたり、「横幣帛」（不明。神事相撲に関係するか）について触れたりすることも含めて、鷲流両

派はもとより、他流にはない独自の演出が認められよう。
総じて、春日日本「土筆」は、鷺伝右衛門派の宝曆名女川本・常磐松文庫本に近いが、結末については独自の工夫があるといえよう。

注

- (1) 拙稿「山口鷺流台本の系統（二）—春日庄作自筆本をめぐって—」（『山口県立大学国際文化学部紀要』20、平26・3）。
- (2) 現存する舞狂言諸曲の形成・構想については、拙稿「舞狂言覚書—職能民と草木虫魚—」（『山口県立大学国際文化学部紀要』3、平9・3）を参照されたい。
- (3) 平成二十二年十月十日、山口鷺流狂言保存会結成55周年記念公演（於野田神社能楽堂）において、「武悪」が上演された（主人・小林栄治、武悪・米本文明、太郎冠者・米本太郎）が、その際は、太郎冠者が主人の目から武悪を隠そうとする所作を、他流と同じように行った。
- (4) 田口和夫氏「小杉本『別習鷺流狂言本』翻刻・解説—鷺流稀曲考—」（『能楽研究』15、平2・12）。
- (5) 法政大学能楽研究所蔵『小舞集』、山口県文書館蔵『小舞 中』、山口県立大学附属郷土文学資料センター蔵『小舞仕方附 下』（春日庄作自筆）、山口県歴史民俗資料館蔵『逆髪 他』（浜田家旧蔵）に収める。
- (6) 拙稿「山口鷺流台本の系統（二）—春日庄作自筆本をめぐって—」（『山口県立大学国際文化学部紀要』19、平25・3）。
- (7) 橋本朝生氏「〔土筆〕の形成—狂言と連歌師—」（『狂言の形成と展開』みづき書房、平8所収）。

On the Kyōgen Texts Written Down by Shunnichi Syōsaku Who Gave Instruction of the Kyōgen Play of the Sagi School to the People of Yamaguchi, Part III

INADA, Hideo

Concerning the Kyōgen Texts Written Down by Shunnichi Syōsaku, we considered the following points of the system of play script : 1) Shunnichi texts fundamentally have distinctive features of the Den-emon branch of the Sagi school. 2) Some parts of these texts, however, have in them some of the elements which are different from those of the Sagi school

